「国語教育研究」第六十三号（令和四年三月刊）
【第62回広島大学教育学部国語教育学会・研究協議】1

言葉による見方・考え方を生かして資質・能力を伸ばす授業

――作品の語に着目して思考を深める――

山田和大

一　はじめに

平成二八（二〇一六）年一二月二一日に中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」が取りまとめられ、各教科ならではの「見方・考え方」が示された。その考えに基づき、平成三〇年告示高等学校学習指導要領において各教科の目標に「～見方・考え方を働かせ」という文言が付けられた。国語科においては、「言葉による見方・考え方を働かせ」という文言が教科と各科目の目標に付されている。

また、今次の改訂では、いわゆる学力の三本柱をもとに「資質・能力」という観点から教科・科目の目標が整理され、「言葉による見方・考え方」を働かせることで育成すべきものとして示された。

これらの「見方・考え方」や「資質・能力」という言葉は教科・科目の目標に関わるものとして使用されており、今後の教科学習を進めていく上で重要な概念となることが想定される。そこで、本稿では、昨年度までに行った実践をもとに、この二つの概念の関係性について整理し、新学習指導要領下における授業はどのように展開される可能性があるのか、という点について考察してみたい。

なお、本稿に記載することは、昨年度までの所属校における実践に基づくものであり、現在の所属の考え方を必ずしも反映しているとは限らないことを申し添えておく。

二　言葉による見方・考え方

授業分析の前に「言葉による見方・考え方」について確認する。

平成三〇年告示『高等学校学習指導要領解説　国語編』には、「言葉による見方・考え方」について次のように説明されている。

言葉による見方・考え方を働かせるとは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い

方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため、「言葉による見方・考え方」を働かせることが、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながることとなる。

（一三頁。傍線は引用者）

傍線を付した部分に表れているように、言葉そのものに着目することが重視されている。

ここで、「言葉による見方・考え方」を分析的に見るために、藤森裕治氏の整理を参考にしてみたい。[1]藤森氏は「言葉による見方・考え方」を次の三点に整理されている。

① 道具としてのことばに対する「見方・考え方」
② 言語活動としてのことばに対する「見方・考え方」
③ 言語作品としてのことばに対する「見方・考え方」

①について、藤森氏は、「概念化」と「線条性」をキーワードとしている。「概念化」は「我々が知覚し認識し思考する対象を特定のイメージに変換し、そうでない対象と識別するために、ことばという記号を付すこと。」（一五一頁）、「線条性」は「ことばによって何かを表現したり理解したりするためには、そのことばを使う社会で共有された規則（文法）に従い、一本の線をたどるようにこれを行わねばならない。」（一五四頁）と整理されている。言葉そのものの機能に着目したものだと言える。

②については、「実際に交わされることばのはたらきを文脈化の視点・観点で捉え、この視点・観点に立ってことばをどう扱えばよいかを考えるための思考の向かい方。」（一七六頁）と整理されている。キーワードは、「文脈化」である。平成三〇年告示『学習指導要領』の「言語文化」2内容〔知識及び技能〕（1）エに「文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解すること」と示されており、「文脈の中で意味が形成されることば」という側面は次期学習指導要領でも重視されていると考えられる。

③は「レトリック」をキーワードとし、「レトリックとしてことばを捉え、その扱い方、扱われ方を考えること。」（一八〇頁）と整理されている。どのように人に伝えるか、人の感性に訴えかけるか、といった視点で捉えられるものである。

以上を踏まえ、以下、実践の分析を行ってゆく。

三　授業実践の分析

（一）「陰翳礼讃」の授業実践

【実施年度・対象・科目】

令和元年度　広島県立福山誠之館高等学校　三年次生　現代文B

【学習指導目標】

・文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを

的確にとらえ、表現を味わうことができる。（現代文B　2内容（1）イ）

【学習活動の流れ】

1　「陰翳礼讃」を読む（初読）。

2　指示語のはたらきについて、本文の記述及び既習の指示語に関する知識に基づきながら分析する。

↓「言語活動としてのことばのはたらき」を文脈に即して捉え直す

3　指示語のはたらきに注意しながら、新たな作品を紡ぐ。

↓「言語作品としてのことばのはたらき」を意識して作品を作る。

4　「それ」に着目しながら、「虚ろなまなざし」を読む。

↓　かぎかっこつきの「「それ」」とかぎかっこなしの「それ」の使い方に着目しながら、筆者の主張を捉えていく。「2」の段階で得た視点を活用して読み取りを進める。

本実践の中核は、2、3の段階である。本実践は、令和元年度九月の実践であるが、年度当初からさまざまな指導をしていく中で、指示内容を捉えること自体に生徒たちの課題があることを見とっていたので、改めて指示語に着目させることとし、ことばの働きとして、「指示語が、特定の文脈の中でどのように働いているのかを分析する。」という学習をする単元を設定した。

2の段階では、生徒が小学生の頃から親しんできた指示語という言語事項について改めて考える。詳しくは後述するが、「陰翳礼讃」の中にある指示語は、単に指示内容を示すという役割以上に、読者の読みに大きく作用する面がある。そのことに着目させることとした。これは、藤森氏がいう「言語活動としてのことばのはたらき」を意識することと言える。ことばのはたらきに着目して表現の特徴などを読み取り、味わうことがこの場面における目標である。

3の場面では、2で学んだことを活かして、実際に文章を創作することにした。次に読む岡真理「虚ろな眼差し」の中でも、指示語の使い分けを読み取ることがポイントとなるが、その前段階として指示語の表現効果を意識した文章を書くことで、後に待つ4の場面における読み取りの精度を上げていくことを企図した場面である。

まず、2の段階における生徒の反応を記す。この段階では、生徒に指示語の分析の視点として、①省略できそうな部分、②「あれ」「それ」の使い分け、③「あの」の効果、④その他の四点を示し、それぞれの効果やその表現効果が生じた原因について考えさせた。

①について、生徒はあえて省略せずに指示語を使うことで「リズムとして美しく響く」効果があることを指摘し、指示語を多用し、同音を繰り返すことにより韻律が生じたと分析していた。

②については、「あれ」は「羊羹だけ特別である」、「回想的、イデア的な感じを与える」という意見が、「それ」は「実際に行ったことを示す」などの意見があがった。原因として、「あれ」は遠距離指示であり、読者を想念の世界に引き込むこと、「それ」は中距離指示であり、「あれ」に比べてより即物的であると考察していた。授業者が事前に教材研究として「陰翳礼讃」を読んだとき、生徒が挙げたような点が本教材の指示語の効果として重要な点だと考えていた。生

徒が説明した言葉は、ややたどたどしいものではあったが、彼ら自身でこうした表現効果に気付いていた。視点を絞って、思考に十分な時間を取ったことが功を奏したのであろう。

③についても②と同様に、「読者が知っていることを思い出させる」、「筆者が想像しているものを指すことが多い」、「具体のイメージを刺激する」といった指摘がされていた。

これらのことを実際に作品で確認してみたい。以下、作品の一部を引用する。

私は、吸い物椀を前にして、椀が微かに耳の奥へ沁むようにジイと鳴っている、**あの**遠い虫の音のようなおとを聴きつゝこれから食べる物の味わいに思いをひそめる時、いつも自分が三昧境に惹き入れられるのを覚える。茶人が湯のたぎるおとに尾上の松風を連想しながら無我の境に入ると云うのも、恐らく**それ**に似た心持なのであろう。日本の料理は食うものでなくて見るものだと云われるが、**こう**云う場合、私は見るものである以上に瞑想するものであると云おう。そうして**それ**は、闇にまたゝく蝋燭の灯と漆の器とが合奏する無言の音楽の作用なのである。かつて漱石先生は「草枕」の中で羊羹の色を讃美しておられたことがあったが、そう云えば**あの**色などはやはり瞑想的ではないか。玉のように半透明に曇った肌が、奥の方まで日の光りを吸い取って夢みる如きほの明るさを啣んでいる感じ、**あの**色あいの深さ、複雑さは、西洋の菓子には絶対に見られない。クリームなどは**あれ**に比べると何と云う浅はかさ、単純さであろう。だが**その**羊羹の色あいも、**あれ**を塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。人は**あの**冷たく滑かなものを口中にふくむ時、あたかも室内の暗黒が一箇の甘い塊になって舌の先で融けるのを感じ、ほんとうはそう旨くない羊羹でも、味に異様な深みが添わるように思う。

（傍線・太字は引用者による）

引用部の「**それ**」については、前から順に「三昧境に惹き入れられる感じ」、「瞑想するときのような心持ち」などのように言い換えることができる。これらは本文の中に言い換えの対象となる情報がある。一方、「**あの**遠い虫の音のようなおと」、「（羊羹の）**あの**色」などで使われる「あの」は省略できるものであり、なおかつ羊羹の色そのものについては直接的な描写が本文中にない。これらは、語り手の感覚世界のものを指示語で表していると考えられ、読者の共感によって初めて伝達がなされるような表現が「**あの**」ではなされていると言える。「**あれ**に比べると何と云う浅はかさ」などで使われる「**あれ**」であっても、読者が羊羹のイメージを明確に持っていないと成立しない表現である。羊羹を直接的に描写するのではなく、読者の想念の中にあるイメージを刺激することで効果的に伝達をしている部分だと捉えられよう。

このような指示語による表現効果は、指示語そのものを読み流しやすいために、生徒自身で見つけることは容易でないかもしれないが、視点を与えてやることで、生徒自身で気付くことができた。

こうした効果に気付いた生徒たちに「陰翳礼讃」にみえたような

指示語の効果を生かした作文をさせた。一例を挙げてみる。

生徒作品「あんぱん」（表現はすべて原文ママ）

勉強の休憩がてらパン屋に行ったが、たくさんの種類のパンがある中で、視線があんぱんから離れない。外からはゴマのツブツブしか見えない屈指の地味なパンである一方で、脂質がそこまで多くなく、エネルギー源となる**それ**は、糖が枯渇した私にとって本能的に求めるものであった。手に取るとずしっときて、**あの**ほどよい光沢性のあるあんがふんだんに詰まっているのを感じ、思わず口にすると、上品な甘さと潰しすぎない絶妙な舌触りを感じ、他のことは一切忘れ、あんぱんを口にふくんだ幸せに酔い痴れていた。　（傍線・太字は引用者による）

この作品は、国語の学習（特に小説作品を読むこと）に対して苦手意識を持っている生徒のものである。苦手意識を持ちながらも、指示語の効果をきちんと生かしながら表現ができている。それぞれ一度ずつしか使われていないが、「それ」は文中にある指示対象（あんぱん）を指しているのに対し、「あのほどよい光沢性の」と使われている「あの」はあんぱんの光沢を直接描写することなく、しかし、読者のイメージを賦活することで、少なくともあんぱんを知る読者の側にはどういう光沢か、しっかり伝わるようになっている。こうした効果を生かしながら書けたことに、当該生徒は喜び、小説などの文学作品にも少しは前向きに取り組もうという気持ちになったと述べていた。なお、その他の生徒作品例の一部を本稿末尾に参考資料1としてあげたので、参照されたい。

ここまでを整理すれば、生徒たちは、文脈の中で表れる「言語活動としてのことばのはたらき」に着目する「見方・考え方」を働かせることで、指導事項から見いだせる「文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確にとらえ、表現を味わうことができる。」という「資質・能力」を身に付けることができ、文章を書く上でも「言葉の働きを意識しながら効果的に表現する」ことができるようになったということが言えよう。

こうした指示語への着目をくどいほどにしたあとに、岡真理「虚ろなまなざし」を読んだ。紙幅の都合上、省略するが、当該文章でも「それ」と「それ」が使い分けられ、読み取りに大きく影響する部分がある。そうしたところを比較的スムーズに、読み深めることができていたことを付言しておく。

（二）「おもて歌のこと」（『無名抄』）の授業実践

【実施年度・対象・科目】

平成二十八年度　広島県立神辺旭高等学校　三年次生　古典B

【学習指導目標】

・古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察することができる。（古典B　2　内容（1）エ）

【学習活動の流れ】

1　俊恵の評をもとに、藤原俊成の歌の第三句を改変する

2　原作と比較して改めて自らのものの見方に従い、俊成の歌を評価する

↓　文脈の中の言葉の意味をおさえて、言語作品としての和歌の評価をする

『無名抄』本文では、俊恵に自身の代表歌を尋ねられた俊成が、

夕されば野辺の秋風身に染みてうづら鳴くなり深草の里

の句を答えたことを受け、俊恵がうちうちに鴨長明に対して、

かの歌は、「身に染みて」と言ふ腰の句のいみじう無念におぼゆるなり。これほどになりぬる歌は、景気を言ひ流して、ただそらに身に染みけんかしと思はせたるこそ、心にくくも優にも侍れ。いみじく言ひもてゆきて、歌の詮とすべきふしをさはさはと言ひ表したれば、むげにこと浅くなりぬるなり。

と述べたということが書かれている。俊恵の評から考えれば、直接的に感覚を詠うのではなく、それとなく伝わるように景色を配置するのが良いということになる。これは、和歌のレトリックの問題を論じた部分と考えることができよう。この本文を使って、生徒に和歌のレトリックとして本当に適切ではなかったのか、ということを考えさせるために、腰の句である「身に染みて」の部分をあえて改変させ、元の歌と比較させることとした。

その結果、生徒が作った改作案が次のものである。

夕されば野辺の秋風　身に染みて　うづら鳴くなり深草の里
1　渡りけり　2　花散らし　3　吹き抜けて
4　ふくおりに　5　よをさそひ　6　雲つれて

1、3は、そのまま野辺の秋風が吹いていく様子、2、6は野辺の秋風によって、他の景物に影響を及ぼしている様子、4は時間を切り取ったもの、5は少し読みにくいが、生徒によれば「よ」に「男女の関係」という意味があること、「深草の里」や「うづら」が『伊勢物語』百二十三段の女性をイメージさせることから、「男女関係を誘う」というイメージで作ったというものである。いずれも四人程度のグループで作成したもので、生徒はよく考えていた。これらを並べた後、元の歌と比較をさせてみたところ、生徒は「身に染みて」の感覚が出てくるのはやはり元の歌であると考え、翻って元の歌の表現の良さに気づくことができていた。

これを整理すれば、「言語作品として成立させるレトリックとしてのことばを意識する」という「見方・考え方」を働かせることで、そのまま本文を読んでいくだけだと何気なく読み飛ばしてしまいかねない歌の良さを「読み味わうことができる」という「資質・能力」を育むことができたと言えよう。

四　新学習指導要領下における授業提案

以上のような実践を踏まえて、新学習指導要領下での授業を、「文学国語」の「書くこと」、「読むこと」、及び「言語文化」の「読むこ

と」にわけて三つ提案することとする。

① 文学国語（例1）

【学習指導目標】

・文体の特徴や修辞のはたらきなどを考慮して、読み手を引きつける独創的な文章になるよう工夫することができる。（2 内容〔思考力、判断力、表現力等〕A 書くこと ウ）

・言葉には、想像や心情を豊かにする働きがあることを理解することができる。（2 内容〔知識及び技能〕（1）ア）

【授業案】（時間数は目安）

・「陰翳礼讃」を読み、指示語や文の長さ、語と語のつながりに着目しながら、文体分析を行う。（2時間）

・谷崎の文体を真似しながら、「おはぎ」「みたらし団子」「ケーキ」「ラーメン」「炊き込みご飯」のいずれかを選択して、料理の魅力が引き立つように四百字程度の文章を書く。（1時間）

・相互に批評をし合い、批評されたことを踏まえて推敲する。（1時間）

批評の観点：谷崎の文体分析で確認した事項、読み手としての感覚

実践事例（一）を踏まえた授業案である。実践では、「読むこと」を中心に指導をするために授業を組んでいったが、その中で谷崎の文体を取り入れて優れた作品を作っていく生徒が少なくなかった。そこで、「文学国語」における「書くこと」の指導をするために組んだ授業が本授業案である。

先に詳しくは述べなかったが、実践の中で、時間に余裕があったクラスにおいて生徒に「陰翳礼讃」の特徴を考えさせ、一人一つ黒板に書かせるという活動をした。つまり、「文体の特徴や修辞のはたらき」を考えさせてみたということである。その中で、たとえば、一文の呼吸が長いこと、それにともなってゆらぎのある文体になっていること、擬音語や色の表現が多いこと、擬人法が多く使われていること、などの指摘を生徒がしていた。この分析で一時間使うことになったが、十分な時間を取ったことで生徒たち自身がさまざまな気付きを得ていた。指示語に加えてこれらの分析を、「書く」前の段階で行わせ、言葉のはたらきを意識させる。

その上で、身近なものである食品について、谷崎の文体をまねながら書き、言葉の働きを意識しながら表現活動をする。このことにより、ただたんに感覚で書く、ということではなく、ことばの適切な、あるいは効果的な使い方ということを意識化して習得させる。

その後、自分たちが挙げた谷崎の文体分析の結果や読み手としての感覚に基づき、相互批評させる。文体分析の結果を使って批評するのは、言葉のはたらきを意識しているかどうかを確かめるため、読み手としての感覚を使うのは表現効果が適切に表れているかを確かめるためである。感覚を使う以上、可能な限り複数人に批評してもらうのがよいだろう。五〇分授業であれば、四から五人は回し読みして批評することができる。この批評をもとに最後に振り返りを

すれば、書き手である生徒自身がさらに言葉のはたらきや表現効果について意識を高めることができ、以降の表現活動にも学びを活かせるようになると考えられる。

② **文学国語（例2）**

【学習指導目標】

・他の作品と比較するなどして、文体の特徴や効果について考察することができる。（2　内容〔思考力、判断力、表現力等〕B　**読むこと**　ウ）

・文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現技法について、体系的に理解し使うことができる。（2　内容〔知識及び技能〕（2）エ）

【授業案】

・「陰翳礼讃」を読み、初読の感想を記述する。その際に、どういう点がその感想を生じさせているのか、根拠を明らかにしながら書く。（1時間）

・指示語を改変した文章（参考資料2）と比較し、「陰翳礼讃」における指示語の効果についてまとめる。（2時間）

（時間に余裕がある場合、初読の感想の中の、他の部分についての言及も取り上げて分析させる）

・宮沢賢治「永訣の朝」を、「こ」系の指示語の効果に着目しながら読み、単元を通じて学んだ韻文を含む文章の中における指示語の働きについてまとめる。（2時間）

これも実践事例（一）を踏まえたものである。修辞としての指示語を活かした文体ともいえる「陰翳礼讃」を活用して、特定の文体、文脈で使われる指示語の修辞的機能を分析させる授業である。

指示語の効果を理解するにはそれが使われているものと使われていないものを比較するのが早い。そこで、授業者の側で指示語を改変した文章を用意して読み比べをさせ、指示語の効果を考えさせる。読み飛ばしてしまいそうなものでも、実は読み手に大きな影響を与えていることを生徒が理解できればよい。

そのうえで、指示語が使われている他の文学作品、たとえば「永訣の朝」などを指示語に着目して読ませる。そのことで、なんとなく読みがちな詩作品をことばに即して読むことにつながるだろう。「永訣の朝」で言えば、「この」などの「こ」系の指示語が多い。一通り抜き出してみると次のようである。

・青い蕈菜のもやうのついた／**これら**ふたつのかけた陶椀に

・わたくしはまがつたてつぽうだまのやうに／**この**くらいみぞれのなかに飛びだした

・**こんな**さつぱりした雪のひとわんを／おまへはわたくしにたのんだのだ

・すきとほるつめたい雫にみちた／**この**つややかな松のえだから

・みなれたちやわんの**この**藍のもやうにも／もうけふおまへはわかれてしまふ

・**この**雪はどこをえらばうにも／あんまりどこもまつしろなのだ

・**あんな**おそろしいみだれたそらから／**この**うつくしい雪がきた

のだ

・（うまれてくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりで／くるしまなあよにうまれてくる）

・おまへがたべるこのふたわんのゆきに／わたくしはいまこころからいのる

・どうかこれが天上のアイスクリームになつて／おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに

この「こ」系の指示語に気をつけながら読むと、原則、妹であるとし子が食べる「雪」やそれをすくう椀に関わる語にのみ「こ」系の指示語が使われており、例外はとし子の発言にのみ認められる。こうしたことから、たとえば、作中の視点人物（賢治の分身といってもよいかもしれない）が、目の前の「ふたわんのゆき」に相当な思い入れをもっている、別の言い方をすれば、意識の上で「ふたわんのゆき」への接近性が認められることが確認できる。作品を書く側から言い換えれば、無意識的かもしれないが、「ふたわんのゆき」への思い入れを表現するために不必要なほどに多い指示語をあえて使っていると考えられる。このことにより、内容面における効果だけでなく、独特のリズムも生まれている。

以上のような学習をもとに、特定の文体・文脈における指示語の効果について振り返り、まとめさせる。そうすることで、以後の学習における読み取りにおいても、本単元で学んだことを活かせるようになろう。

③ 言語文化（例3）

【学習指導目標】

・作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めることができる。（2　内容〔思考力、判断力、表現力等〕B　読むこと　エ）

・言葉には、文化の継承、発展、想像を支える働きがあることを理解することができる。（2　内容〔知識及び技能〕（1）ア）

・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解することができる。（2　内容〔知識及び技能〕（2）エ）

【授業案】

・「おもて歌のこと」、正岡子規「十たび歌詠みに与ふる書」を読み、俊恵の批評している内容や正岡子規の短歌に対する考え方を理解する。（1・5時間）

※生徒実態に応じて、和歌以外は口語訳を使うことも考えられる。

・万葉集、古今集、新古今集、近現代短歌それぞれを読むエキスパートグループを作り、和歌・短歌の特徴を俊恵や正岡子規のもつ視点を踏まえて分析する。その際に、教科書等に載っている和歌の修辞技法について一読させ、担当する和歌の中に使われている修辞技法についてもまとめておく。（2・

5時間）

・ジグソーグループになり、前時までにまとめたことを共有し、時代ごとに共通点や相違点がないか、考察する。（2時間）

実践事例（二）に基づき設計した案である。言語文化という科目の特徴として、言葉の文化を通時的に理解していく側面がある。その面を意識した授業展開である。使う教材は韻文の中でも、和歌・短歌である。同じ五七五七七という形式でありながらも、時代によってさまざまな特徴がある和歌・短歌を通時的に見ていくことで、単独で和歌・短歌を扱うより、時代的特徴が際立ってくるため、言語文化の流れを理解しやすいのではないかと考えて組み立てた。

まず、和歌・短歌についての批評文を読む。さまざまな批評文が考えられるが、一つは鎌倉時代の「おもて歌のこと」（『無名抄』）、もうひとつは正岡子規の「十たび歌詠みに与ふる書」を使用してみる。前者は、実践事例で取り上げたように、どういう和歌がよい和歌だと考えられていたか、という一つの見方を示すものであり、後者は、紙幅の都合で引用は省略するが和歌と近代短歌がどう異なるかという視点を得られる文章である。これらをもとにして、和歌・短歌とはどういうものか、ということを整理する。

その後、万葉集、古今集、新古今集、近現代短歌それぞれを読むエキスパートグループを作り、和歌を読解させる。基本的に、教科書に載っているものを使い、時間数等によって数の調整をする。一グループ一首だと少ないので、三首くらいがよいのではないかと思われる。分析の過程の中で、和歌や短歌を読む上で必要な修辞技法に関する知識についても、教科書や文法書、便覧などを使って整理をさせておく。分析の際には、参考にした二つの文章は、あくまでも分析の指針とするだけであり、ここから外れてくる歌も当然ながらあることを生徒に伝えておき、二つの文章から得た視点では分析できない部分は、どういう特徴があるか、生徒たち自身に整理させる。それにより、生徒が自らことばに着目し、分析的に読んでいこうという目が多少なりとも養われるのではないかと考えている。

分析した結果をもとに、ジグソーグループになり、時代ごとの相違点や共通点を見出し、和歌・短歌の通時的な理解につなげていく。

どのような和歌を選ぶか、ということは、なかなか悩ましいが、生徒実態を踏まえて興味・関心を持ちそうなものを中心に選ぶのがよいだろう。

注意しておくべきは、この単元だけで完全に和歌・短歌の歴史を理解させようとは思わないことである。数時間の授業の中で、千年以上にもわたる和歌・短歌の歴史を理解することは容易ではないし、現実的でもない。今回、扱うことにしたものにしても、室町・江戸の和歌や連歌などを扱っていない。本単元では、レトリックを中心とした言葉に着目しながら、和歌・短歌を読み解く見方・考え方を刺激できれば、それでよいと考えておくことが肝要であろう。

五　おわりに

以上、つたない実践をもとに、三つの授業提案を行った。「文学国語」にしても「言語文化」にしても、今までの授業研究の積み重ね

の上に授業を組み立てることになる。その際に、育成すべき資質・能力や、資質・能力を育成するために働かせていく「言葉による見方・考え方」をどう授業構想の中に組み入れていくかということが問題となる。今回、提案したものについても、一案に過ぎず、改善の余地はあろうと思う。諸先生方のご批正を仰ぎたい。

また、今回は文学教材を中心に提案をしたが、評論文教材をはじめとする他の教材を活用した単元構想、あるいは「話すこと・聞くこと」に関する授業構想など、考えるべきことはまだまだ多く存在する。この点については、今後の課題としたい。

【参考資料】

1　「陰翳礼讃」の授業での生徒作品例（原文ママ）

「みたらしだんご」

以前、旅行先の京都の茶屋で食べたものを思い返してみる。そこでは、2本、串にささったものが、深緑の長皿にのせられ、出てきた。団子など、普段あまり好んで食べるものではないので、久しぶりに目にした気がした。やはり、寺に隣接する茶屋ともなると、スーパーで、パックに入っているようなものとは違って、皿に、ベチョベチョと、みつが垂れていることも、もちの形が異様に整っていたり崩れていたりすることもない。手にとると、小腹を満たすには十分な重さを感じ、日光にあたって、てらてらと、輝くみつは、その奥に隠した、団子の焼き目を、うまい具合に透かしていた。同じこげ茶だと言うのに、みつは、焼き目を、更にうまそうに見せてくれるのであった。一口で食べきれると思って口に含んだが、意外にも、一つが大きく、少し残してかみきった。その弾力もさることながら、かみきった前歯にベタベタとしつこくつきまとってこないのも団子としてのうまさを増長させるようだった。口の中で、みつがとろりと団子の上から舌の上へと、落ち、融け、のど奥に流れていきそうになる。それを慌てて、舌先ですくい上げ、団子と共にかみしめる。あの、丸々とした、白く少し湿ったような肌が、段々と、ぶつ切りになっていく。それでも、その、切り口には、口の中のことであるにもかかわらず、心地良ささえ感じる。のみこむまで数分とかからなかったが、その間、私は誰よりも幸福そうな顔だったにちがいない。

「やきいも」

私が幼い頃、秋も中頃になり、半袖から長袖への衣替えをする辺りの頃だったのだが、祖母はその頃によくやきいもを買ってきてくれたものだった。当時、私は小学生だったので、黒い上着に身を包み、手をこすりながら帰ると、家の机の上にある湯気だったやきいもが置かれており、それはそれは温かく、うまそうに見えた。

そして手を洗い、さらに冷たくなった手がやきいもに触れることのなんとあたたかいことか。じんわりとした温もりと、どっしりとした重みが手につたわり、しばらくは離すのが惜しいほどだ。

思うに焼きいもはあのなんともいえない上品な紫のうすかわに包まれているからよいのだ。あの薄皮のざらざらとした感じと、中身の温かさを伝える薄み。そして丁ねいに上から皮をむいたとき、つやつやとした黄金色の身がでてきたときの感動。ぷん、とにおいた

つあの甘い香りは、身の甘さを伝えてくる。誘われるままに一口食べたとき、口の中で身が潰れ、滑らかなクリーム状になったとき、いもの甘さが口の中を満たす。いものあの秋の香りをふんだんに混ぜた深い甘みと比べれば、砂糖をふんだんにつかった甘みのなんと薄っぺらなことか。

2 **「陰翳礼讃」（改変例。一部の指示語を削除、一部は改変）**

私は、吸い物椀を前にして、椀が微かに耳の奥へ沁むようにジイと鳴っている、遠い虫の音のようなおとを聴きつゝこれから食べる物の味わいに思いをひそめる時、いつも自分が三昧境に惹き入れられるのを覚える。茶人が湯のたぎるおとに尾上の松風を連想しながら無我の境に入ると云うのも、恐らく**自分が吸い物椀を前にしたとき**に似た心持なのであろう。日本の料理は食うものでなくて見るものだと云われるが、私は見るものである以上に瞑想するものであると云おう。そうして**日本料理を味わうこと**は、闇にまたゝく蝋燭の灯と漆の器とが合奏する無言の音楽の作用なのである。かつて漱石先生は「草枕」の中で羊羹の色を讃美しておられたことがあったが、そう云えば色などはやはり瞑想的ではないか。玉のように半透明に曇った肌が、奥の方まで日の光りを吸い取って夢みる如きほの明るさを喞んでいる感じ、色あいの深さ、複雑さは、西洋の菓子には絶対に見られない。クリームなどは**羊羹**に比べると何と云う浅はかさ、単純さであろう。だが羊羹の色あいも、**羊羹**を塗り物の菓子器に入れて、肌の色が辛うじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。人は**羊羹という**冷たく滑かなものを口中にふくむ時、あたかも室内の暗黒が一箇の甘い塊になって舌の先で融けるのを感じ、ほんとうはそう旨くない羊羹でも、味に異様な深みが添わるように思う。

注

（1）藤森裕治『学力観を問い直す　国語科の資質・能力と見方・考え方』第4章「「見方・考え方」を〝家を建てる〟ことで紐解く」（明治図書、二〇一八年）。以下、藤森氏の指摘は同書による。

（広島県教育委員会高校教育指導課）